

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
 昭和二十二年六月十五日 發行(毎月一回・十五日發行)

(通第三三六号)

# 慈

# 光

第二十九卷

第六号

## 次

煩悶の下に光明あり……………近角常観……………(1)

「大経」結びの段……………福島政雄……………(5)

共に是れ凡夫のみ……………山本晋道……………(10)

新春の感謝……………松村繁雄……………(13)

念仏詩抄……………木村無相……………(16)

三願転入に就いて……………花田正夫……………(19)

# 煩悶の下に光明あり

近角常観

吾人が切に現代思潮のために煩悶したまえる人にむかつて警告せんと欲することは、煩悶の下に光明あり、即ち今その脚下に樂地ありということである。

華嚴の滝に投じ、阿蘇の噴火口に投ずる人は、今やまさに大安慰を得べき真際まできていながら、自ら身を水泡に帰せしめ、生きながら心を火燄の中に入るものである。

未だ光を見出さぬ間の所作で致し方もなきことなるも、徒らに虚飾と浅慮とを發表して人の笑を買うのみならず、全体死後の境界につき如何に考えつつあるのであらう。勿論その志の憐むべきは察するにあまりあるも、如何程煩悶におちいればとて自ら死を招くというは宗教の説きつつある来世苦樂の境につきて一顧せぬ者で、その所作は古聖賢に対する一大侮蔑である。絶対の救済に対する根本的罪惡である。

吾人は世の煩悶して空しく身を亡す人に向つて警告する。仏陀の光明はまさに諸君の上を照らしつつあるのである。すべからく一刻も早く仰いでこれに安んずべし、もし

な横着、驕慢な考では信仰に入ることは出来ぬ。

次に吾人は道を求めるために煩悶して居る人に向つて警告する。われはこれ程までに求めているに光の来らぬは残念であるとは思つて居らぬか。道すじは解っているが、実感の伴わぬには困ると思つて居られぬか。全体われは求めて居ると思つて居るのがあやまりである。すでにすでに仏陀が我等を求め、我等を喚びたまうのである。それなのに自分で求めつつあると思つて居る人は自分で遁れつつあるのである。

又道すじが解っていると思つて居るのがあやまりである、実は少しも解つて居らぬのである。全体仏の恵みは解つて喜ぶのではない、恵みを喜んで疑うことの出来ぬのが信じたのである、明らかにしたのである。

そもそも我等が大いに喜んで始めて仏陀があるように考えるのが間違ひである。我等が喜ぶも喜ばぬも、気がつきても、気がつかずとも、たとい仏にそむくとも、なお仏陀は我等をあわれみ、悲しみ、愛し、いつくしみたまいつつある。我等はかくの如き仏陀に対してみれば、我等より求めずして、光明おのずから来り「何事のおわしますすかは知らねども、ただありがたさに涙こぼるる」と感泣し奉るのほかはないのである。

この如く仏陀の御恵みが我等の胸中に届きたるが即ち口

直ちにこれに安んずること出来ずとも、かならず救済にあずかることはすこしも疑なきことなれば、たとい如何なる境遇にあるとも、心をくじかず最終に暁の明星の輝くときまで待たなければならぬ、吾人の切なる忠告は「直に光を仰げ、仰ぐこと出来ねば待て！」ということである。

なお一步進めて、煩悶を解かんがために道を求めつつある人にむかつて警告する。

そもそも宗教を煩悶を解く手段と考えておらぬか。信仰ということを己を安んずる道具と考えておらぬか、仏陀をわが煩悶をぬぐいさるべき雑巾の様に考えて居るのではな

いか。

全体仏陀は恵みの親であり、生命である。我々は全身を投じておまかせするのである。その足下に感泣するのである。我々は生殺与奪いかようともしそのお心にまかせ奉つて、あだかも慈母のふところに抱かれた如くである、我等は仏陀の御力にまかせ奉つてこそ安心することが出来るのである。我等が仏陀を手段として煩悶を去らんとしよう

にあふれ出でて南無阿弥陀仏となるのである。これ実に過去の日本において、源平時代の煩悶を一掃して、鎌倉時代の清廓なる一世を照したまひし光明である。法然聖人が

南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本

という一大法幢は、当時の心靈界の中心である。上下、貴賤、文武、僧俗、みなその獅子吼の下に雲の如く集り来りたるのである。花のさかりの敦盛を討ちて無常を觀した阪東武者の熊谷直実も馳せて聖人の門下に剃髪出家したのである。東大寺の大仏を焼討にして聖武、光明の両聖の偉觀を兵燹にまかしたる平家の落武者、重衡郷も書をもって聖人に道を求め安心して断首せられたのである。なお山賊海賊、強盜放火、殺害を極めた津の国の耳四郎も、檐(のき)の下に聖人の教を聞きて遂に改悔懺悔し、一世の達人、人臣の至極たる関白兼実公も冠を傾けて聖人の法筵に感涙随喜せられたのである。

実に南無阿弥陀仏の名号は、一切衆生があこがるる大慈の父の御名である、一切衆生が安んずる大悲の母の御懷である、一切衆生の兄弟が護持養育をこらむれる親切あふるる乳母の乳房である。誰かこの念仏の下に全身を投じて渴仰せざる者があるか。当時、温厚博識できこえた聖覚法印も、従順如法の信空上人も、聖人の門下に安心を見出されたのである。しかして同じく聖人の選択本願の念仏の御教を聞いて敬虔の念をもって満たされ、信心歡喜せられた

親鸞聖人の胸中、南無阿弥陀仏、往生之業、念仏爲本の一つて見たされたのである。歎異抄の二章に、

しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法門等をも知りたるらんところにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり云々。親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。たとい法然聖人にすかさされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。

この如く全身をあげて如来の光明中に投じてみれば、何人か心を安んぜざる者がある。仏陀の御恵みの下に、智愚の区別もなく、境遇の善悪もない、大慈悲に對しては吾人は一点の私をさしはさむべき余地を見出さない、何ぞ自ら求めて苦しめ、いたずらに小智浅慮をめぐらして煩悶懊惱せん。いわんや自ら身を水火の中に投ぜんとするが如きは、万代の光明たる古聖賢に對する侮蔑たるのみならず、大慈大悲の如来の悲憫救済に對して実に申しわけないことである。そもそも人の煩悶は、自己の境遇の善悪につき、倫理行為の善悪につき、人情につき、信念につき、万事についてこの善悪をはからうのであるが、吾人はこの如き絶対の大慈大悲に對しては、このはからいは無用である。

まことに如来の御恩ということをば沙汰なくして、我もひと、よしあしということのみ申しあえり。聖人の

この一語をもって、幾多の煩悶者に警告する次第である。吾人は決して煩悶をよしみする者ではない。無碍の光明は一切衆生の上に光被して、如何なる煩悶をも照しやぶるといふことを断言して警告するのである。

すべからく、すぐ今その光明を仰げ、すぐいま仰ぐあたわずんば、自らその光明の来る時を待て。世の煩悶者が、かくのごとき仏陀の救済あることを知らずに、むざむざ死を急ぐを見て断腸のおもいたえぬ。こいねがわくば同信の人々とともに、せめてこれらの人にこの大安慰のあることだけなりと知ってもらって、その光明の暈の来るを待たせたいものである。

明治三十九年八月二十七日朝

信州、善光寺にて記す。



仰せには善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり。その故は、如来の御心によしとおぼしめすほどに知りとおしおぼしめすほどに知りとおしたらばこそ悪しきを知りたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそ仰せ候いしか。歎異抄の総結文にあるが、そもそも善し、悪しの沙汰をするのは煩悩具足の身をもって善くすることが出来ると考ふるからである。火宅無常の世界に居ながら悪しきをやめ得ると考ふるからである。

全体人間は罪惡のかたまりである、世界は泡沫（ほうまつ）の夢である。絶対の闇黒、絶対の迷盲、絶対の虚妄である。ひとりこの間を照らしたまう絶対の光明、絶対の眞実、絶対の清浄は仏陀である。吾人はすべてのほからいをなげうって、如来の慈悲海中に投入すべきである。ここにいたって如何なる境遇も、如何なる理想も、如何なる倫理的標準も、人生的欲望も、野心も、眞面目も、いずれも人間的の小さな立場をひるがえして、如来の御心に融和して同一鹹味の信仰となるのである。ここに至って煩悶懊惱もあだかも宿夢のように消えるのである。そして眼底にかがやき来るものは尽十方無碍の光明である。

「煩悶の下に光明あり」

### 近角先生法語

この頃も、或人が、このように国民が不信仰の状態にあつては我國の将来も如何ならんと、非常に慨歎していた。私はこれに對して何とも返事の見ようがなく、ただ「へー」と申したなりにしておいた。するとその人が翌日になって、昨日あなたは私があれば程に赤心で慨歎して話すのにあなたはなま返事をして、自分は心中頗る不満であった。あれはどういう訳だとたされた。

私はそこで「私は現にこのお慈悲がまします上は、必ずわが国は、このお慈悲が現われて下さると信ずる故、少しも不安には思わない。我々悪しき者をいよいよお見捨てないお慈悲故、現に私がこの事を実験して居るから、如何に時代思想が險惡でも、かならず一人一人にお信心がおこることと信ずるから、返事の見ようがなく、なま返事をしておいた次第である」と話した事である。

(求道誌 九卷五号より)

# 「大經」結びの段

福 島 政 雄

## 二、照徹のおもむき

釈尊はあらためて阿難尊者に向つて  
「お前は着物を整えて合掌して無量寿仏を拝め、無量寿仏  
がそこに現れておいでになる」

と仰るのであります。そこで阿難尊者は立つて自分の  
着物を整え、西方をむいて合掌し、敬つて地に体を投げて  
拝まれますと、無量寿仏がすぐその眼前に現れて下さつ  
て、大光明を放つて一切の諸仏の世界をお照らしになる、  
そしてそのお光の中に一切のものが皆包まれてしまつて、  
声聞だ縁覚だと云っているそれらの小さな光というものが  
無量寿仏の大きな光に覆い包まれてしまつてゐる。そして  
仏様の光明が実に明るく、その中に色々のものが見えて来  
るのであります。

その中で私共の問題となりますのは、その色々の衆生の中  
に、胎生(たいしよう)のものとは生(けしやう)のもの  
がある、そういう問題であります。胎内から生れると  
云うのと、化生で不思議にポーツと生れて来る、その二種

に光を身に受けているという感じはない、何となく自分の  
いのちがこもっているという心持があります。何にこもっ  
ているかと申しますと、釈尊の仰言つた様に、自分はこん  
な善い事やうして仏の国に生れるんだ、往生のためにはこ  
ういふ善い事もしなければならぬ、ああいう事も云わなけ  
ればならぬという様な事で、自分のいい事と思つてゐるも  
ので自分の命のまわりをめぐるして、自分というものを包  
み隠しております。

で歎異抄では疑城と云いますが、それでも同じことであ  
ります。疑い、やっぱり自分の何かいい事を積んで行かな  
ければ仏のお浄土に生れられないのじやなからうかとい  
う、それが何と云いますか、自分の心のまわり、命のまわ  
りに隔ての垣を作っているわけでありませう。まあお城の中  
に閉じ籠っているか、胎内に閉じこもっているとか、そう  
いう隔ての垣の様なものを自分のまわりにめぐらして、そ  
の為に光を受けている様だけれども、どうやらと、こう云  
う心持、これは一方から申しますと、私共が信仰を自分は  
得たか知らん、自分の心は開けた様にもあるが、開けてな  
いようにもあるという状態で苦しんでいるのに当りましょ  
うと思つてあります。自分は開けた様に思つけれどもど  
うもじかにまだ光を受けてる様な気がしない、つまり何か  
隔ての垣をめぐるして、仏のまことというものをじき  
じきに我が身に受けていないという様なところであらうと

類の衆生がある、それが解るか、と釈尊が仰言るのであり  
ます。

そうすると、成る程そういう二種類が見えますが、どう  
して二種類があるのでございますかとお尋ねいたしますと  
その胎生というのはまだ本當に仏様のまことをじかに身  
に受けて居ない、どこか少し疑惑の心を持っていて、やっ  
ぱり自分の功德と思うものを修めてそして仏の国に生れた  
いと思つている、そういう人々が胎生である。それから化  
生と云うのは仏のまことをすなおにわが身に受けて、自然  
に何の無理もなく何時生れたかわからぬという様にして仏  
の国に生れている、それが化生であると仰言るのでありま  
す。

その胎生、化生という事について、また私の事を少し申  
し上げます。胎生という私はこういう感じをおこします  
のであります。丁度子供が母の胎内に居る、そう云う心持  
でありますまいか。温い中に包まれていて気持はいい、そ  
れから何となく光は受けて居るようであるけれども、じか

思うのであります。

胎生とはそういう事ではなからうか、實際そういうこと  
なら私共も経験のあることでありまして、自分はよっぽど  
心が変わってきた様に思つけれども、まだ何処か通らん所が  
あるという様な心持が続いている限り、それは疑城胎宮で  
ある、気持は悲しくない、何か自分でいい事でも出来るよ  
うに思つておりますし、気持は悪くないという面もありま  
す。それからこれじや信心とは云えないだらうという一種  
の苦しみもあるという様なところであります。

さて、例の三願転入という点から伺いますと、やっぱり  
十九願、二十願というあたりを行つたり来たりしている、  
そう心持であります。二十願に徹したという事になります  
と、私共はわが身にじきじきに仏の光を身にうけている、  
仏のまことが自分の心に届いているという事を自覚してい  
る、というやうな所が二十願を身に受けている心持と思つ  
るのであります。それについて臼杵祖山先生から承つた  
ことがあります。「十九願から二十願を通して、それから  
十八願に落ちつくと云うが、それは十八願というところに  
腰を据えてしまった、これで何もかも解決してしまつたと  
いう事にはならぬのである。十八願の世界に心が開けて来  
ると十九願、二十願の世界に迷う自分の姿というものがは  
つきり見えてくる」と伺いましたが、これはどうでありま  
しょう。

そういたしますと、胎生と化生というものを両方分れた別々の全く趣きの違ったものという風に一応云ってありますが、然し胎生を通つての化生でありましょう。今度化生すれば胎生である自分の姿が見えて来る。胎生である間には胎生である自分の姿は見えないのであります。もがいているか、いい気であるか、そんなことであります。自分の姿が見えない。それから化生の世界がひらけますと胎生という自分の姿がはっきりと見えてくるのであります。そこで釈尊が、胎生の者が五百歳ばかりを経て、その間は常に仏を見奉らず、教法を聞かずという様な事を仰言っています。胎生を通じて化生、胎生と化生と全く別れ別れの衆生になってしまふのでなくて、胎生の者は必ず化生に生れて徹する、胎生の者を化生にまで徹せしめずにはおかないというのが仏のまことである。それが胎生の境地にある自分に徹つてきて目が覚めると、化生の身となると同時に胎生の自分の姿というものが見えてくる、こういう関係になると思うのであります。私自身の事を考えますと、そういう事が云えると思ひますのであります。

それから一寸申しおくれましたが、阿難尊者という方は御承知の様になかなか悟りが開けなかつた方で、仏弟子の内、智の勝つた方、情の勝つた方、意志の勝つた人と別け

ますと、阿難尊者は情の人でありました。それだけに情の深い所がありますかわりに、なかなか仏のお悟りに徹する事が出来なかつたのであります。仏の御入滅の時に阿難尊者は非常に泣き悲しんだという事で、他の悟りの開けたお弟子からたしなめられました。

そのあとで金剛子とかいう方の言葉を聞いて、初めて心が開けたという人ですが、非常に情の勝つた人である。情の勝つた人は一方にいい所があると同時に悟に徹するの骨が折れるのであります。その阿難尊者の前に阿彌陀仏が大光明を放つて一切の世界を光に包んでお出まじになった。そこはどういう問題だろうと思ふのであります。これがやっぱり初めて阿難尊者の心に仏の大光明が射しはじめた、浄土真宗において「廻心という事ただ一度あるべし」と歎異抄に仰言つてあります。ただ一度の廻心というその所の趣きをこういう風に現わされてあるのであります。尊者阿難の事でない、実は私で申せば私の事なのであります。

つまり私なんかの様に煩惱の非常に強く、非常に激しくてなかなか断ち切る事が出来ないという様な者に最初に大光明を開かれる、その所である。つまり胎生である者がその卵の殻からパツと生れて来る、その所の趣きをこういう風の言ひ現わし方で釈尊が仰言つていられる。私共はめいめい実は大無量寿経の会座のはるか末席に居るわけ

であります。もつとも私なんか大経の会座にいるんだと始終考えているのじやありませんけれども、実はやっぱり大経の会座のはるか末席にすわつて居るのであります。そして阿難尊者が大光明に接して拜まれているところ、私なら私の心に仏のまことが届いて、そして私の心が開けはじめる。そこをこのようにお経の上で云い現わされてあります。阿難尊者は私の代表であると云つてもいいか、こういう事になりますわけです。これが釈尊が無量寿仏を拜めと仰せられ、大光明の無量寿仏が出現なさるといふ心持であります。

それからもう一つ、黄金の鎖でつながれているという、あそこが問題であります。これは釈尊が譬え話で仰言るのであります。立派な宮中に住しながら黄金の鎖で撃がれている人があつたら、そして食べ物でも何でもいいものを豊富に与えられているというなら、それでいいのか、そうじやあるまい。いくら黄金であつても鎖で縛られているのは非常に不自由ですから、何とかしてその鎖を断ち切つても自由の身になりたいと感じるだろう。そこで胎生と云うのは一面においてはそんな風でありましょう。黄金の鎖とは、我々が自分はこの立派な行をやっているぞ、こんないい行があるぞという事で、自分が得意になっている、それがつまり黄金の鎖で縛られている有様であると、余程前に私の友人から聞かされましたが、実際その通りであり

まして、胎生の者とは、一方から云えば黄金の鎖で繋がれていて結構な生活のようだけれど、どうも不自由である。鎖が鉄でなくて黄金だからいいと云う様なものじやない。こういう問題がそこにあるのであります。

ところがなかなか私共は自分を知らない内に黄金の鎖で繋いでいる、自分が自分を繋いでいるので、やっぱりなかなか自由の身になれない。無碍自在というところになかなか行けない。そうでありましょう。自分は駄目な者だとよく言いますけれど、駄目な者だと云う奥底に、それでも自分はこんな取り所はあるという思ひが必ずひそんで居るのであります。それが黄金の鎖でありまして、何処か自分が、無意識の内に自分自身を黄金の鎖で繋いで無自覚で居るのであります。そこを釈尊が自覚させて下さる。胎生という言葉で一方私共の自覚をうながして下さると同時に、これは「繋ぐに金鎖をもってし」と仰言つて、實際自分で自分を黄金の鎖でつないで居る様なものである、自分で自分の身のまわりに隔ての垣を造つて居る様なものである、そこがわからんと仰言るのであります。

ここの所がなかなかわかりませんが、實際自分を繋ぎながら、自分で隔てをつくりながら、そこがわかつていないのであります。そこがわかるというのはいよいよ仏のお慈悲が身に徹して、底の底までしみこんで、ああ自分は、なるほど自分で黄金の鎖でつないで居る様なものだ、自分が身

のまわりに隔ての垣をめぐらして、胎生の姿に自分がおるのだという、そこが見えてくる時には、化生しているわけでありませう。

自然と、仏のお慈悲の光の中に、何時の間にやら生れ出ている、そこが非常に味わいの深いところでありまして、胎生、化生、金鎖という様な問題は私共の現実の生活の有様をそういう譬で云いあらわしてありますし、そして、大事なことは、自分ももう信心を得てしまつたぞと、これで解決したぞという事で腰を落ちつけてしまわれんものが、私共にあるという事であります。それを積尊は阿難尊者にむかつて「胎生の者があるという事を見よ」と、それに「化生の者があるという事を見よ」「金鎖をもつて身を繋がれている者があるという事を見よ、しかしながらそれが五百歳である」と、五百歳たつたらと仰言っているのは、ある期間、ときがかかるかも知れないけれども、必ず自分は胎生であつた、金鎖でつながれていた、自分で自分を繋いでいたという事に必ず目を覚めさせられるのであるぞと仰言っている。目をさめさせられるとはじめて自分が繋がれている黄金の鎖が見えてくる、自分が廻らしているところの垣が見えてくる、こういうことを仰言っているのだらうと私にはそのように受け取れますのであります。

## 共に是れ凡夫のみ

### 聖徳太子の御言葉

仏教では三毒の煩惱をあげられて、私共の見苦しい心の動きの中で、ことに、貪欲と瞋恚と愚痴とを誂められていきます。その中でも、私は生来気の短い氣質で、ともすればすぐ立腹して、人を苦しめ、自分も苦しんで参りました。

仏法を聞かせて頂くようになってから、この瞋恚が如何に毒害の多いかということをお教えされましたが、なかなかこの氣質が直りません。こんな私には聖徳太子の十七憲法の中の次のお言葉がことに身にしみます。

十に曰く。忿（こころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）を棄てて人の違を怒らざれ、人皆心あり、心各々執れることあり。彼れ是（よし）みすればすなわち我れは非（あし）みす。われ是みすればすなわち彼れは非みす。われ必ずしも聖にあらず、彼れ必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ。よしみし、あしみするのこころ、なんぞよく定むべけんや、相共に賢く愚かなること鑑（みまがね）の端（はし）無きが如し。

### ルソーのことば

或人が不幸で苦しんでいる時、私達にゆとりがあれば、その人を慰める。

その時、ことばや、あるいは物を贈る。この行いはたしかによいことである。だがこの人達の間には、恩を感じたり、世話をしたという気分がどこかであつて、さっぱりしない場合が多い。

ところが、お互いに何は出来なくとも、同じ苦しみに堪え、同じ悲しみに涙した者同志は、親しさがどこまでも深められ、泣き崩れたままに終ることなく、互に元氣つけ合つて、不幸を明るく乗り越えることが出来る。

## 山本晋道

是をもつて彼の人は瞋（いか）るといへども、かえつてわが失（あやまち）を恐る。我れひとり得たりといへども衆に従いて同じて挙（おこな）え。

忿とは、心のいかりで、瞋とはそれをおもてに出して顔色をかえることであります。何故そんなに怒るかという人が思うようになってくれないからであります。然し、こんな感情の動き方はあきらかに我儘であり、驕慢であります。太子はねんごろにそれをさとして下さいます。

### 十人 十色

人が自分の思うようになってくれぬときに、先ず考えねばならぬことは、人は皆、一人ずつちがう心を持っているだから各自その人らしい考え方によって生きているのであります。十人十色という、一寸の虫にも五分の魂はある。だから匹夫もその志を奪うことは出来ません。だから一人ずつ顔色がちがうように、考え方の相違ということはあるべきことであります。だから彼が是とする所に必ずしも我は賛成しかねることもあり、我が是とすることに必ず

しも彼が賛成してくれぬこともある。ここに意見の衝突が起こり、忿憤の原因が発生します。

しかしこの時、まず反省しなければならぬことは、自分の意見が必ずしも常に正しいとはきめられない、何となれば自分は必ずしも聖者ではないから、時には感情で動いたり、利害で左右されていることもあり。また人間の力には限りがありますから、自分の見方が必ずしもあつていないかも知れません、だから自分は正しい積りでいても実は判断が間違っていることも多いのです。

又自分の意見に反対している相手が、必ずしも愚者とは限りません。自分を理解し、賛成せぬ者はみな愚者であるなどと決して思いあがってはなりません。仏様の鏡の前に立つてふりかえれば彼も我も共に是れ煩惱具足の凡夫であります。是非善悪を判断している肝心の「自分」という尺度が、時々あてにならないものであります。だから凡夫同志が、自分は正しいとぬぼれてきめた是非善悪は、決して窮極の権威あるものではありません。それなのにこの点を反省しないで、自分だけが正しいと両方が主張し、お前は間違っていると各自が言い争うなら、その議論ははてしなく、丁度鑽にはしの無いようなもので、いつまでもぐるぐる廻って解決はしません。

だから相手が瞋った場合でも、これに応じて直ちに立腹せずに、一歩さがって、自分も聖者でないから、何処かで

それなのに私共はいつも「共に是れ凡夫のみ」ということを忘れ勝ちであります。これを照らし出して下さるのは、如来からいただく信心の智慧であります。

こうしたことを知らされながら、何時もその場限りで、同じような見苦しい過ちをくりかえしている私であることを思うにつけ、度々信心の溝をさらえて、弥陀の法水を流すより外に道のない私であります。それにつけても、触光柔軟（そくこうにゆうなん）とお誓ひ下さった御本願がおなつかしいことでもあります。

（昭和十七年九月稿す）

（花田追記）

私も反抗心の強いことをわれながらあきれておりますにつけ、太子のこの教はいつも身にしむことであります。ひそかに思いますのに、太子は三十歳頃に仏道に開眼せられて、われ人ともに進むべき道として憲法を發布して下さったのであります。ことにこの条は、お若い太子が共に政治を執らねばならぬ蘇我馬子との関係において、血涙を流された挙句に到達された、太子御自身の道であったと御推測申しております。

大関族で横暴の馬子、太子の叔父君にあたられる崇俊<sup>ノボ</sup>天皇をも殺害し、日本で最初の女帝、推古帝をむかえ、太子の理想をも踏み破って当然と思つてゐる。この慢心の頂上にある者と内政、外交共に難問を抱えられながら政治を執

相手を瞋らせるような過失を犯したのではあるまいかと反省しなければなりません。そして思い当たら素直にわびることが大切で、相手が考え違ひをして、こちらの気持ちに分らずに怒っている時には、自分もこの人のように早合点で立腹して人を傷けていることであろうと反省の手がかりにすることが肝心です。また周囲の人がわからずばかりで、自分がひとり道理を会得している場合でも、彼等を軽蔑して独断専行しないで、なるだけ皆と歩調を合わせ歩きつつ、何時しか事を正しい方向に持って行くように心掛けねばなりません。

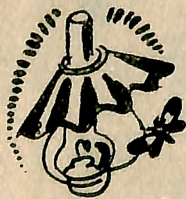
信心の智慧

この行き届いたお言葉は、私にとりましてことに有難い反省の鏡となつて下さいます。

省みますと、私が立腹する時の気持ちは、大抵自分が正しいとぬぼれている時です。或は相手を見下して軽蔑している時であります。全く驕慢であり、わが儘であります。「共にこれ凡夫に過ぎぬぞ」との太子の御一言は鋭く私の胸を刺します。自分が凡夫であると知れば、へりくだつた態度がうまれます。相手も凡夫であると理解すれば、ひろく温かい心が湧いてきます。ここに万人が謙譲に、いたわり合い慰めあつて生きる、なごやかな道がひらかれます。それでこそ自他共にたすけ合つて生きて行ける道がひらけてまいります。

られる太子は、どんなに苦勞せられましたことでしょうか。相手を力で討伐するのであれば、其子入鹿の恨みとなり転々と修羅の巻がひろがり、黙つて傍観したのでは横暴はつるばかり。ここに大きな壁に向かわれた太子は、御自身の開眼を求められて、慧慈、慧僧の両師を迎えられて、法華経、勝鬘経、維摩経を身読されて、心眼が開かれると共に、悪逆の馬子に対し「共にこれ凡夫のみ」と信証され、篤く三宝に帰敬されては、御自身のまがれる心を仏力によって引き戻され引き戻されて、馬子をも胸におさめ容れたまうて、共に政治をおこなつて行かれたのであります。

私の反抗心のむらむらと燃えあがる時、この太子の仰せが強くきびしく胸を刺して下さるのであります。こうして教えにまもられながら七十三年の齢をようやくすごさせて頂きました。けれどもすこしも私の素地はなおりませんにつけ、横着な子供が親にまもられ続けている身を愧じ且つ謝しまつるばかりであります。



# 新春の感謝

松村繁雄

昨年松村さんは浄土へ帰られました。一周忌を迎え、時々頂いた法信の中、昨年のお新春、松村さんの最後の年の所感をここに誌し、念仏裡に故人をお偲び致しますよう。  
(編者)

お互に無事で新しい春を迎えますことは、誠にありがたい、目出度いこととございます。然しながら無常の風は吹いてやみません。「今日は無事」と思いましたも、さていつまでの命やら、一日一日は私の限りある残り少ない命の行きて帰らぬ旅路の一日一日でございます、一日も油断のならぬこととあります。

思えば、この五十一年こそ、わが人生の完成、完璧を期して、一日一日を大事に生かして頂きたいものです。然し、私の持ち合せの智慧や思案では迷うばかりでございます、必ず如来さまから直き／＼に御智慧をいただかねばなりません。御和讃に

智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり  
信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし

ウツラウツラと日を過しております、これが私という人間の姿であります。

その私を、愚に気付かず、無常も知らぬ、哀れな私を「煩惱具足の凡夫」とお見抜き下さって「どの手にしても仏の光明の世界へ導入れずはおかず」と、誓いをたて、願いをおこして下さる如来さまであります。

その如来さまの智慧と慈悲のお呼声を聞かせて頂いて、「煩惱具足の愚かな凡夫」と信知させて頂く時、  
煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば  
すなわち穢身すてはてて法性常樂証せしむ

と、私の愚かな／＼智慧も思案も何一つ役に立たぬと分らせてもろうて、如来様の真実の廣大無辺の智慧と慈悲の光明の中におさめて下さり、やがて真実の浄土へ生れさせ下さるのであります。

本願力にあいぬれば 空しく過ぐる人ぞなき  
功徳の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし

如来さまの智慧と慈悲のおめぐみに遇う時、それが空しくなるということはなく、やがて、限りないお智慧に護られ、極みのないお慈悲に摂められて、私の迷いの根は切れ、あろう限りの煩惱の濁水も転化されて、無量の光明土に生れさせて頂くのであります。

慈光はるかにかぶらしめ ひかりのいたるところには  
法喜をうとぞのべたまう大安慰を帰命せよ

とありますが、「信心の智慧」は「智慧の念仏」を法蔵菩薩の願力から頂く時、自然にひらけるのであります。ここに如来様の御心、お呼び声を大切に我身に聞かせていただくことが大切であります。

如来様は私を「煩惱具足の凡夫」と呼んで下さいませ。「煩惱具足」とは、愚かであるのに、愚かであると知らない本当の愚か者でありまして、親鸞聖人は「愚禿の心は内は愚にして外は賢なり」と御自身の上で名告っておられます。そこを私の身にあてはめて味わいますと、私は智慧があると思ひ込んでおりますけれども、私のその智慧というもの、おしい、ほしい、だけの智慧であって、明日は散る露の命であってもそれを知らず、人の死は知っても、自分が死ぬとは気づかず、一日一日は、往きて帰らぬわが命のはしからはしから消えているのに、それもそうと思えず、今日が無事で面白ければ、それで仕合せと思つて、その夢まぼろしの楽しみと気付き得ぬ、それでも、智慧があると思つて、おれは、おれがと思つて善し悪しを争うて、

慈光はるかに一遠い宿縁であります。私は如来さまの智慧と慈悲のひかりに、久遠の昔から、照らされて、照らされて、照らされておりました。そのおひかりがとうとう徹到して下さって、私は今はじめて、久遠の真実のみ親に遇わせていただけるのであります。

超世の悲願ききしより 我等は生死の凡夫かは  
有漏の穢身はかわらねど 心は浄土に遊ぶなり  
久遠のみ親のおまことを知らせて頂いても、私は相変らず煩惱具足の、罪深く障りの多い凡夫で、チツとも変りはありませんけれど、心はみ親のいます浄土に通わせていただくのであります。

弥陀の本願信ずべし 本願信する人はみな  
撰取不捨の利益にて 無上覚をばさとるなり  
ひとたび、久遠のおまことを身にうけさせて頂くと、撰取して捨てたまわぬめぐみ、どうあろうともお見捨てのない広大な力強いたしかなめぐみの中に、親様と二人づれの旅をさせていただき、やがて無上、最勝のさとりを浄土で得させて頂くのであります

こうした限りないめぐみを蒙りながらも、煩惱に覆われて、娑婆の夢幻の快樂のみに心ひかれ続ける底抜けの愚か者であります。この私をかねてしろしめして、ことに憐れと思召して下さると知らされ、お念仏に帰らして下さる



のでありました。利井鮮明和上の歌に

妄念の口より出する称名は 十劫このかた呼びたまう

声

み光りに納めとられて護られて、送られて行く身こそ

安けれ

とあります。

南無阿弥陀仏を称うれば 此世の利益きわもなし

流転輪廻の罪消えて 定業中天のぞこりぬ

本願を信じ、念仏させて頂く時、私の煩惱罪業によるは

てしない流転輪廻(るてんりんね)の罪を消していただき

乍らめぐまれた生涯を送らせていただくのであります。

さあ、この五十一年こそ、私の最後の年でございます。

一日一日を念仏の中に生かしていただいて、浄土への道も

悠々と歩ませていただきましたものであります。それにつけ

ましても、福島政雄先生のお歌、

同じ世に、おなじ仏のむねに生きる

久遠の友を恋いてさすろう

を思い、また住田智見講師の

連れ多き 浄土の旅や 春の風

も思いあわせながら、

みひかりを浴びて咲き咲きみひかりの

なかに桜は散って行くなり

### 念 仏 詩 抄

木 村 無 相

ただ ただ ひたすらに

源通寺和上仰せに

// 助けてやるで

念仏申せ

往生の世話してやるで

念仏申せの

仰せじゃぞー//

念仏したら

助けるではない

念仏したら

往生の世話してやる

ではない

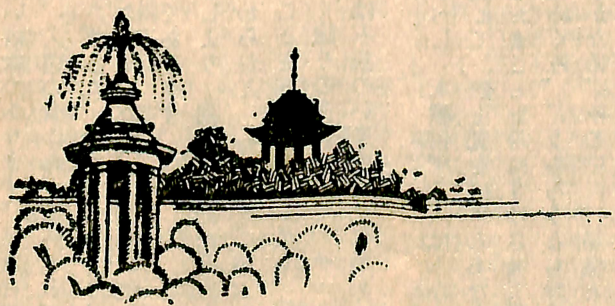
ただひたすらに

助けてやる――

と誦しております。

○

(註) 五十一年七月、七十九歳の天寿を完うされま  
した、合掌。



ただひたすらに  
往生の世話して  
やる――  
ただひたすらに  
ただひたすらに――

ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツ

聞いてゆくこと

聞いてゆくこと  
聞いてゆくこと  
どどこまでも  
聞いてゆくこと  
聞いてゆくこと

一つしかない

聞いてゆくこと  
聞いてゆくこと  
六字のおこころ  
聞いてゆくこと  
聞いてゆくこと  
一つしかない

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

いただくばかり

ナムアミダブツの  
おいわれ聞けば  
わたしのための  
お名号  
わたしお呼びの  
お名号  
わたし助くる  
お名号

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

ナムアミダブツは

ナムアミダブツは  
引受けたという  
お言葉  
わたしの後生を  
引受けたという  
お言葉

引受けられて  
ナムアミダブツ  
不足のあろう  
はずがない  
ただただお礼  
申すだけ  
ナムアミダブツと  
申すだけ

ナムアミダブツは  
お引受けのお言葉

ナムアミダブツと  
いただくばかり  
ナムアミダブツと  
いただくばかり

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

この機をば

古徳の歌に  
//この機をば  
地獄なりとて  
取りすてて  
お助けの機は  
いずくにかある〃

この機をば  
地獄なりとは  
見捨て得て  
建てたまいたる  
弥陀の本願

ナムアミダブツは  
お礼のお言葉  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

法信抄

「最近になって闍提こそわれという感しきりに覚えます」  
を拜読しまして、涙がぐっと迫ったことでありました。

われこそは闍提(せんだい)なりのおたよりに  
涙しせまる われもしかれば

『信卷』には、  
「伊蘭子」(いらんし)とは、我が身是なり。「梅檀樹」  
(せんだんじゆ)とは即ち是れわが心の無根の信なり。  
「無根」とは、我はじめより如来を恭敬することを知らず  
法僧を信せず、是を「無根」と名づく。  
とありまして、歎異抄の非行非善も頂かれますことです

### 三願転入に就いて

花田正夫

私共はただ自分の力をたのんで、種々な願いを満足しようと人生の門出をいたしますが、そこに思うにまかせぬ問題が次から次へと山積みされ、自分の能力の微弱なこと、智慧のせまく不十分なことを省みさせられ、まず先覚者の教えに心を向けはじめようになります。

そこで私は、人類の歴史の上で、幾多の千年以上にわたって大きな燈火を掲げて下さった人々の教を学びはじめました。その初めは、釈迦も人なり、我も人なり、聖人はたして何人ぞ、と云った元気で進みましたが、いよいよ実践しようとする、とても越えられない厚い壁が見えてきました。ここに聖覚法印の唯信鈔のはじめの

「聖道門というは、この現世にあって、修行を重ね、功徳を積んで、今生に證悟を得ようと励むのである。真言の教ではこの身そのまま仏陀と同じさとりを得ようとし、法華の教では今生で眼耳鼻舌身意の六根を清浄にするさとりを得よう」とつとめるのである。実に教の本来の目的

のない身をかねてからよく知ろし召されて、その者をどうあっても救い遂げないでは自分も仏とはならないとの本願に帰して、かつは懺悔し、かつは感謝する人以上の三つで、浄土の教に志しながらも、生れもった我執がやまずに、仏様に御苦勞をおかけするのであります。重複しますが、大略して申しますと、現世で自分の力ですとることとは不可能と気づいて、浄土に往生してさとりを開こうと願いはじめます。その時、浄土に生れる以外に自分には道はないとなります。

然し、物を買うには代価がいるように、浄土に往生するには、諸善、万行を修行して、善くならなければとても迎えて貰えまいと思つて、善根、功徳を手当り次第に積み重ねて、それを仏様に廻向して浄土に生れようといいたします。その諸善の中に念仏も数えあげますが、弁慶の七ツ道具の一つに譬えられます。こうしたことを繰返しているうちに、人に対する親切にしても、親に対する孝行にしても、弟子として師に仕える道も、賽の河原の石積みで、またしても崩れ、またしても失敗して、末通るものは何一つないとなった時、もう大きな力にすがる外にないと知らされるのであります。

かくてお念仏は、善根のかたまり、功徳のたからである。と聞くにつけて、この念仏一つを唱えて、その力で自分をよくしようと懸命の努力を続けるのであります。その有様

はそうであるけれど、大聖を去ることも遠く、五つの濁りにみちた現世では、この身このままさとするということは何億という人々の中で一人もありえぬことである。だからこうした行者も、この世でのさとりをあきらめて、後の世に望みを托する人々が多くなっている云々」

との指箴(ししん)が行く手を知らして下さるのです。

さて、ここに浄土に往生して成仏しようと願うにつきまして、その心の変化に三つの状態があります。

第一は、諸の功徳を修して浄土に生れようと願う人。

第二は、諸善万行の道で、自分がおさめ得ぬことが知れて、最善、最勝の功徳とある念仏にかぎるとなつて、念仏申す力で自分をよくしようとする人。

第三は、自分が善くなることは、自分の力でも、また仏力を頼んでもどうにもならぬと知らされて、自分をよくしようとする心をひるがえし、このたすかるよすがは色々で、高声に終日唱える者、時々日数を区切って同志と励まし合い乍ら念仏を続ける者、等々であります。

○

以上の二つの共通点は、浄土に生れるには自分がよくならねばいかぬ、それでこそ仏様も迎えて下さろうと考えて、自分でよくなろうとしたり、仏の御力にすがってよくして貰おうと願ったりしているのであります。だから、自分の心がおだやかなごんたり、よろこぶ心がおこると、これでこそ救うて下さると喜び、それが崩れると矢張り駄目かと歎く、という風に、点滅、浮沈、消長して安心の時はないのであります。

これというのも絶対無限な仏力を、相対有限の心で付度(そんたく)して、こちらがよくしないと仏様も捨てられるであろうと相対五分五分に考えているからであります。そして何時かはよくなれるだろう、自分の努力が足らぬからだと、種々と苦心惨怛しますけれど、瓦をどんなに磨いても玉にならぬように、血で血を洗ってもきれいになる時がないように、煩惱のかたまりの身には、善いとなると慢心、悪いとなると卑屈、賢いとなると驕ぶり、愚かとなると愚痴、有つても無くても憂い、生き死に共に苦惱、はてしない砂漠の流浪が続くのであります。

こうした私に、聖人は、そこは塞がっている、どうにもならないのだと寄り添うて下さつて、弥陀仏ばかりが、こ

の生死の苦から離れられないわれわれを何処々々までお見捨のなく助け遂げて下さるのだ！と、わが御身にかけて知らせて下さるのであります。

ここに、広大無辺な仏様のみこころの中にすでににおさめられながら、なお久遠このかたの迷執から、仏をへだて狭い自我の殻に閉じこもっている身を慚愧し、この身お目あての大慈大悲のおまことにおさめられるのであります。

ここに法華經にある有名な「長者窮子(ぐうじ)の譬喩」が連想されます、もとよりこれは小乘根性を転入して下さる譬であります、これを引用いたします。

ある長者の一人子が、親を捨ててひとり遠い街に走り、自分の気まま勝手な生活をしているうちに、落ちぶれて、ルンペンとなり、僅かに日雇をして処々方々を流浪しているのであります。一方長者はあらゆる手をつくしても子供が行方が知れず、何時か帰るだろうと心に期して、働き続け、財を積み、家を造ってただに子を待つのであります。或日、窮子は立派な家を見つけ、それが父の家とも知らずに、窓から室内をのぞくと、七つの宝に飾られた家に、沢山の侍者に付き添われている長者を見るのであります。

さて長者は窓外にたたずむ窮子を見出し、身に弊衣を着ているが、我が子であると直感し、使者に命じて連れ戻そうとしましたが、窮子は、自分が怪しまれて連れこまれたら奴隷にされるか、殺されると怖れおののいて、許しを乞ります。青年の頃、兄や姉の死に驚き、人生の真実のよるべを求め、手当り次第に書を読みましたが、結局自分はとうにもならぬ身に行きつまり青息吐息をしている時、伯父と池山先生から歎異抄を勧められ、弥陀の浄土、仏陀のまことこそ私の帰れる唯一のふところと心に定め、時々聞法しておりましたが、今から考えますとその時すでに如来の家に連れこまれていたのであります。然し、自分の愚悪さから仏様をへだて、自我の狭い殻の中で、善悪の宿業につながれて、長年苦しみました。

そうした間に知らされましたことは、世間の学問は習えば習うほど上達しますが、仏法はそれとあべこべで、聞けば聞くほど、段々と自分の愚悪さが知れてまいりました。そこに諸善万行の道も駄目となり、念仏一つと思いつても、その道さえも点滅し、若存(にやくそん)若亡(にやくぼう)の浮沈が続く、私は仏法へのよすがは無い身、聖人の仰言る、いずれの行も及び難い身と、どちらにも光のない身と知らされた時。この身に同(どう)じて、一緒して下さる聖人の仰せに引き入れられて「他力の悲願はかくの如きの我等がためであった」と光明が射しそめたのであります。福島先生は「久遠の黎明」に譬えられました、自分が悟ったとかいうのでなしに、いつも東方に朝日を仰ぐような喜びであります。

い、遂には驚怖のあまり悶絶するのであります。

それを見た長者は、子を放さすと、子は喜んで街へ帰りかけます。そこで風采のあがらぬ召使を呼びボロをままとわけて、その子を追わし、友達となって我家に連れもどれと命じるのであります。

窮子も自分同様のルンペン姿の者に親しみ、やがて勧められるままに長者の家に入りましたが、永い間の流浪の生活で人を疑い、ひがむ心も強いので、長者は自分で肥柄杓を持って近づき、自分に子がないのでお前を子の様に思うから、どんな困ったことでも相談しておくれ、どうか何時までも此所に住んでくれと、なだめ励ますのであります。やがて年月を経て、段々に心も素直になり、番頭にまてなつたが、長者を親とも知らず、この財宝は皆長者のもものと思いこんでいるのであります。そうこうする間に長者は百歳になり、親類縁者を招待し大宴会を開き、そこで初めて「この者は五十年前私を捨てて街に出た一人子です。私はこの子を探し出しましたが、余りにも身も心も貧しく汚れているので今日まで種々と育ててきました。余命も少ないので今日からは、私のあとを継がせますから、私同様によろしく」と宣言するのであります。

これを聞いた窮子は「われ願わざるにかかる財宝を身一つに頂けた」と驚きよろこぶのであります。

長々と譬喩を述べましたが、この窮子こそ私共の姿であ

終りに、この大悲のめぐみを蒙って、四十八願中で一番大切な十八願に「唯五逆と謗法を除く」とありますことをじっと見つめ、私自身が五逆の阿闍世同様な身であり、また提婆達多のように、仏心にそむきすめの身が照らし出されてまいります。ことに私の謗法は直正面から仏法をそしめるのでなしに、仏法仏法、念仏念仏、如来聖人と一応あがめながら、その徳を、知らぬ間にわがものとして人に誇り、広大な仏法をかえって鉄鉋にしてしまつて、油が水に浮いたような、われこそ仏法者となり、わが法すぐれたり、他をさばいている、そういう謗法の身を或時強く知らされまして、聖人が、難化の三機として、五悪、謗法、闍提をあげて下さり、この者は声聞や菩薩の力ではいかんともすることが出来ぬが、弥陀仏の大慈悲のおまことばかりがよく治して下さると仰言つていることがいよいよ身にしみてまいりますことでもあります。

ことに闍提とは、断善根、不信の者であります。善根を断つのですから、すでに仏の導きで一時は善根も積んだ身でありますのに、それを捨ててさからう者であります。知らずに犯した罪はむしろ軽いといえましようが、知っておりながらあえて罪を造る身、従って何ものも信じ得ない、誰からも相手にされない、孤独地獄に沈む者のことでもあります、聖人はその闍提に御自身を見出されて「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し

立ちける本願のかたじけなさよ」と懺悔と感謝をせられたのであります。ことに愚禿悲歎述懐和讃に、御自身に微塵もよいところも、よくなつたところもない身と慚愧せられ、さらに八十八歳の自然法爾章の終りに述べられた御和讃には、

よしあしの文字をも知らぬ人はみな

まことのころなりけるを

(内賢外愚)

善悪の二字知りがおは

大それたかたぢなり

(内愚外賢)

是非知らず邪正もわかぬこの身に

小慈小悲もなけれども

名利に人師このむなり。

で生涯の筆をおさめられたのであります。私共は聖人聖人と口で讃えながら、その実聖人を踏みつけ、聖人より上に立つて、われよし、われかしこしと振舞うている、文字通り謗法闡提の身であります。南無阿弥陀仏。

### 曉露光

左 千 夫

寒き秋風 秋の空、  
高き青空 澄むゆうべ、  
戸の辺に立って何となし、  
澄める雲井を見やる時、  
淋しき思ひおのずから  
心のおくに波を立つ

罪を罪とし知らざりし  
吾を悲しく顧みて  
無常は人の上ならず  
はかなき身をと悔いくれば  
頼みてたよる物をなみ  
世はとこ闇に冷えはてぬ

とうとき文をさぐり得て  
苦惱を出す道たどる

### いのち尊し

昭和十年頃であった。名古屋医大の聞信会の報恩の集いがあった。その時おかれて走せ参じられた青年医の方が

「昨夜、毒を飲んで自殺をはかった三十余りの男の人が病院に運ばれてきたので、徹夜して手当を続け、やっと生命はとりとめることが出来たが、さて分別盛りの人が死を選んだのであるから、希望通りにしたのがよいのか、いやなこの世にとどめるのがよいのか、色々考えました」

とのことであった。その時、勝沼精蔵先生が早速、

「それは医師として全力を尽して助けねばならぬ。人間の考えは変わるものだから……。僕は青年の頃、厨川白村の恋愛至上主義に共鳴して、若い男女の心中は最も美しいと思つたことがある。しかしこの年齢になって見ると考えは変つてきた。その青年も、いっかあとで助かってよかったと思ふ時が来るだろう。ことに仏法を聞信すれば、人間に生れたことを境遇の如何をとわずに喜ぶ道がひらける。その仏法が流布している日本に生れているのだから、その教によつて、きっとそうなれるのだから、そのことを念じながら医師は何処までも生命を護らねばならぬ云々」

と答えられたが、四十年もたった今も忘れられぬありがたい問答であつた。

不思議や ここに光あり

かすかに針の先ばかり

見えみ見えずみ有りがてに

遠く遙けくおほゆれど

吾を導く光かも

善悪淨穢の差別なく  
あまねくたすけん御誓い  
ただ信心を要とすと  
ただ信心を要とすと  
あな尊とのみ言かな  
光に添えし力なり

信仰の心催おすを  
ただ何事もおもほえず  
自然に名号唱うれば  
あかとき露の白玉に  
天つ日のさす尊さは  
吾心どの闇も照るまで

(求道誌より)

# あとがき

カナダで開教使として法耕を続けていられる生田さんからのたよりに、「こちらで若い人が多く寺に詣つてくれ、また二年ほど前から白人の方々のメンバがふえて嬉しく思えます。然しアメリカやカナダでは真宗はまだまだ日系人の宗教だという觀念が強、早く白人や黒人の開教使が出て来ることを願っています。禅宗は白人社会にとけこみ、白人中心の禅堂も出来ているのに、真宗寺院は日系人の社交の場になっていて、安心ぬぎになっているのが残念でたまりません。唯聖人が、実というは必ずしものみとなると仰言つたことを憶念して、出来るだけの努力を続けております」とのことでした。

さて日本の現状はどうであろうか。自身自身が「鷗鷺一人がためなりけり」の原点に帰り、他に対しては「弟子一人も持たず」の求道不止の無碍の白道を、心光照護の下にたどらせて頂きたいものであります。近角先生の煩悶の下に光明ありの稿は、当時、藤村操が日光で自殺する等の事件が続く時のものであります。現在、東大、京大の学生の自殺が多いと報道され、又毎

日の新聞に自殺者の多く報せられるにつけ、先生のお教えを改めて頂きました。福島先生は大経によられて御自身の信の歩みを表白して私共の指箴として下さいました。

山本晋道師は聖徳太子の「共に是れ凡夫のみ」の金句によって、御自身の隱憂の煩惱の強いにつけ、ことに身にしんでのお信味であります。

松村さんの一週忌を迎えますにつけ、昨年春に貰いました法信を載せました。飯山の正受老人(白隠禪師の師)が「今日一日」を常にとかれ、行誡上人は「死なぬ人の言うこと」と、無常を忘れた者を誡められたことなども思い出させられます。

木村さんは大切に身をいたわりながら信友を求めての旅、「たすかるよすがのない者へのただ念仏一つ」を身をもってあかして下さっています。

三願転入の私稿は、方便化土は、仏様の慈育して下さる場であり、聖道門から浄土門に帰し、三願を転入させて頂くのは、頂く本人としては、次から次へと落第して、及第する見込みのない身と知らされて、仏の至心にひろわれる点を誌しました、御判読下さいますように。

## △御案内▽

- 一道会例会。毎月、第一、二、三、日曜午後一時半。
- 南区駈上町二の八八、花田宅。
- 市バス、新郊通り一丁目下車。
- 地下鉄、新端橋終点下車。
- 名鉄呼続下車。
- 教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小桜町二丁目四番地。
- 市バス、北山、又は御器所通り下車。
- 地下鉄、御器所通り下車。
- 八月一杯は例年通り休ませて頂きます

定価	半年 七〇〇円 (送共)
	一年 一四〇〇円 (送共)
名古屋市南区駈上町二ノ八八	編集・発行人 花田 正夫
電話八二一〇七〇三七番	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 坂部 光雄	名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社	振替口座 名古屋一〇四七〇番
	郵便番号 四五七